

県研究主題

児童一人ひとりの言語活動を充実させ、
「伝え合う力」の育成を重視した学習指導と評価の工夫・改善

提案1

提案者 小杉 実花(横須賀地区)

<研究主題>

伝記を読んで、自分の生き方について考えよう
～人物事典づくりを通して～

1 提案内容

児童の読書実態から、本を読む楽しさを知り、自分を振り返る契機にするために伝記を読むという単元を設定した。具体的な言語活動としては「人物事典」作りを取り上げ、視点をもって読むことや交流することを重視して実践した。

(1) 実践内容について説明

提案資料参照。

(2) 児童の作品について

Aさん 相違点だけでなく、自分の行動や生き方についても考えられるようになった。

Bさん 自分ならどんなことができそうか、考えられるようになった。

Cさん 秀吉と自分とを比べる。秀吉と儀兵衛とを比べることで、自分の生き方に生かしたい部分を明確にできた。

Dさん 儀兵衛とエジソンの生き方の性質が違いすぎて比べるのが難しかった。

(3) 成果(○)と課題(●)

○教材文で伝記の読み方を学んだことで、自分の生き方について考えられるようになった。

○交流によって自分の考えが広がったり深まったりした。

○伝記のおもしろさを知ったことで伝記を読みたいと思う児童が増え、次の読書活動へのつながりが生まれた。

●伝記の内容理解の難しさ。さらなる読み方の指導が必要。

●比べ読み→内容で比べることは難しい。選書についても一考の余地あり。

●他教科との関連。

2 協議内容

(1) 言語活動の「人物事典」について

Q 事典のページに設定した項目とその意図

A 「書名・著者・出版社」「人生と業績」「感動したところ」「生き方(自分と関わらせて)」が設定項目。次の読書につながるように、また、自分の考えや感動が表せるようにと考えて設定した。他に、読み取った子どもの思いが表れるように、キャッチコピーも付けた。

Q 教材文を読んでいる時間に、人物事典はどのように活用したか

A 学習の中で業績・心が動いた箇所が出てきたら、「人物事典に書けるね」と言うようにしたが、細かくは言わなかったので反省点でもある。人物事典と関係付けられればよかった。

Q 教師の人物事典のモデルについて

A 教室に『野口英世』があり、自分自身も幼少時代に読んで感動した経験があるので、野口英世で作った。1時間目にモデルを示したことで、生き方に目が向くようになった。交流とともに、業績だけにとらわれないための手立てとなった。

Q 作った後の人物事典の活用について

A 朝の会で一人ずつ発表させていった。教室の後ろに置いておき、いつでも読めるようにした。冊子にすると一人しか見られないので、まとめてはいない。

(2) 交流の様子／教材／他教科等との関連 その他

Q 10時間目の交流の様子について知りたい

A 人物事典を参考に交流。一人終わったら生き方や考え方にしぼって交流。班の発表だけでなく、よいものは全員の前で話す時間も設定。聞き手は質問しながら考えをぶつけ合う。

Q 異なる伝記を読んでいる子どもの同士の交流とは？

A 儀兵衛と比べた自分の生き方に関する思いは深めることができたが、選んだ本の場合は業績で比べられないので、その人物を突き動かした「思い」について交流した。

Q 並行読書で扱う本について

A 家庭から児童が持ってきた本は必ず一度目を通し、内容として考えることが難しいものなら別の本を勧めた。ただし、児童の能力の実態によっては、内容が薄くても伝記にふれることを重視してOKにしたものもある。伝記という「本」を扱いたかったので、他社の教科書や過去の教材文等を扱うことは考えなかった。

Q 本単元と道徳との関わり

A 道徳は価値項目に向かって学ぶ。国語で扱うときは、価値ではなく、自分の考えを深めることが目的。道徳の授業で伝記を読んだときには、儀兵衛と似ているという意見も出た。

○10時間の単元で指導事項一つは少くないか。効果的な読み方なども入れるとよい。

○伝記を小学校で読むのは大事。キャリア教育の視点からも、生き方について考えさせたい。

○きめ細かい丁寧な単元づくりが素晴らしい。

3 まとめ

(1) 単元を貫く言語活動

◎目的意識としては不十分であったのではないかと。「自分の生き方を考えるために」の部分をしっかり前に置いて意識させるとよかった。人物事典が儀兵衛を読む際に生きていなかった。子どもも教師も人物事典については意識が薄かったと言える。

◎授業の指導過程の中で先生がモデルを示したことは、読みを方向付けするのではという意見もあったが、教材研究の面でも教師がモデルを作ることは大事。

◎「言語活動の充実」はなぜ行うのか、改めて考える必要がある。実生活に生きる言葉の力、思考力・判断力の育成のため。生きる力を育む。

(2) 並行読書を含む教材の扱いについて

◎伝記とはどのようなものか。伝記そのものを読むことに意義がある。伝記を読まないという読書実態の中で、読ませる経験をさせたことが大事。生き方に直接ふれることができる。

◎儀兵衛の教材の読み方。最後の業績についての意義付けの部分から読ませて、前に戻ってそれがどこに表れているかを拾っていく読み方をさせている。精読ではない読ませ方。

◎並行読書は今後も大事にしていきたい。教材文で学んだ視点で読む。次の読書へつなぐ。実生活の読書へもつなぐ。並行して読むことと教材文を学習した後に読ませることとの効果の違いを考えていく必要がある。

◎これからの国語科の授業は、習得してから活用するのではなく、習得と活用とを一緒にやるのが大切。活用を通して基礎基本を身に付ける、よい試みだった。

国語科の学習が日常生活に生きていることが大切だが、子どもたちを読書に親しませたいという先生の思いがよく伝わってきた。小杉先生の学級は子どもと子どもとの関係、子どもと教師との関係がとてもよい。熱心に、また中身の深い交流が行われていた。信頼感によって支えられたよいクラス経営をしている。誠実で謙虚な提案だった。

<研究主題>

話題設定の力を育てる言語活動の工夫
～自分のアイデアを紹介する活動を通して～

1 提案内容

付けたい力を明確化し、言語活動を単元を貫いて位置づけ、言語活動を通して指導事項を指導し、目標に準拠した評価を行っていくことが大切である。単元づくりと授業実践を通して、言語活動の充実に向けた授業づくりについて考えていきたい。

「伝え合う力」とは、「人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重し、言語を通して適切に表現したり正確に理解したりする力」である。入門期においては、みんなに話したり、友だちの話に興味をもって聞いたりすることをまず身につけたい。しかし、実際には、経験の程度や身につけている力に個人差が大きく、経験を積む機会をどの子にも与えながら力を育てていく必要を感じた。

(1) 日常的な活動

- ・日直のスピーチ 1人ずつ→2人ずつ…緊張がほぐれる。機会が多くなる。
型を示す…次を予測しながら聞くことができる
- ・日記 週2回程度継続して取り組む…書くことに慣れる

(2) 国語科での取り組み

授業でポイントをしばった指導を心がける。

① 授業実践

はっぴょうしよう「あったらいいな、こんなもの」

計画当初は、話す・聞くの指導事項アイウエオを網羅した15時間の単元になったが、別の単元やすでに学習したものをのぞき、指導事項をアとイに絞り込み、7時間の単元に組み直した。

単元を貫く言語活動として「アイディアコンクール」を設定し、必要な言語活動を取り入れて構成した。発表の場を、発表会ではなく、アイディアコンクールとすることによって、伝えようとする意欲を持たせ、目的意識や相手意識を持った学びの場になると考えた。

- ・ドラえものの道具からの導入
- ・発表につながる思考
- ・考えをもつ時間の保証
- ・対話をプラスに
- ・付箋紙の活用

これらの工夫もした。身近なキャラクタードラえもんに親しみをもち、楽しく活動することが出来た。付箋紙は書くことが苦手な児童も抵抗なく書くことができること、付箋が増えていく楽しさがあること、なくさないこと、貼り替えができるので失敗をおそれずに書けること、色で視覚的にも意識ができるので、落としているものに自分で気付くことができること、作業中の見取りや声かけもしやすいことなどがあり、使用は効果的であった。

② 成果と課題

成果

単元のねらいを絞り込むことにより、付けたい力に意識を集中して指導することができた。単元の骨格がはっきりと表われるので、一つ一つの活動や時間ごとの目標を明確にすると同時に単元全体を見通し、つながりを考えながら指導していくことができた。

実践では、単元を貫く柱としてアイデアコンクールを設定して単元を構成した。アイデアコンクールという発表の場があることにより、子どもたちは発表に向けて主体的に学習を進めることができた。単元を貫く言語活動の設定は児童の意欲を高め、児童はゴールとなる活動に向けて自ら考えを膨らませ、目的意識をもって学ぶことができた。

導入で親しみのあるキャラクターと楽しい道具をモデルにしたり、取材のための時間を保障したことで、児童は楽しく想像を膨らませ、学習を進めることができた。対話や発表のモデルによって、学習の方法を理解することも意欲につながった。付箋紙の活用など細かな手だてで学習成果を得ることができた。

課題

単元計画を立てる際に、児童の実態把握を一層進めることと、書く時間の扱いを見直し、より充実した単元にしていくことである。発表の際には、プレ発表を行うなど互いに見合っ練習する時間をとると、より充実した発表ができると感じた。発表の場も、ねらいとする力の視点から見届けていく必要があり、単元計画や各時間の目標設定を見直していかなければならない。

2 協議内容

(1) 単元を貫く言語活動を組み込んだ授業構想について

- ・ ねらいを実現するためにどのような教材、どのような単元にするかをよく吟味することが必要。
- ・ 単元の最後にあるのが貫くになるのか。貫くとはどういう活動か。貫く活動とするにはどうしたらいいか。
- ・ 単元を貫く言語活動はこの提案では説明なのか、紹介なのか。見取りはどうするのか。話題設定はどうするか。
- ・ 付けたい力を明確にした単元構成を立てるために、児童の実態や児童の気持ちや年間の計画を考慮する必要がある。

(2) 読書に結びつける指導と評価の工夫・改善について

- ・ 見通しをもつこと、ふり返りの視点をもつことが必要である。